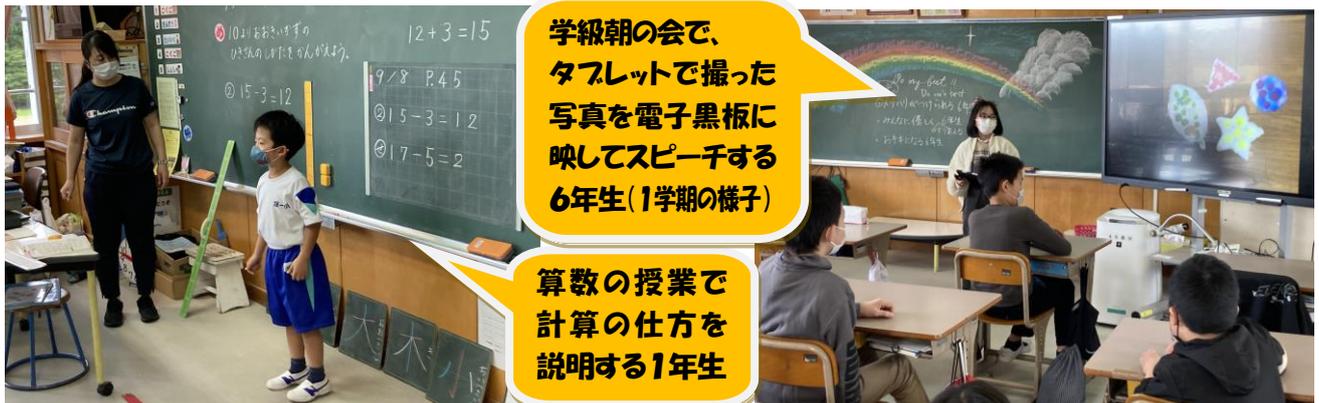




はっぴようの力をつける

本校では、2学期の重点の一つに「はっぴようの力」の育成を掲げています。各学年では、国語の授業を中心に、発言の仕方や話し方のスキルを身に付けさせ、授業はもちろん、学級朝の会・帰りの会などにおいて、子どもたち一人一人の発言やスピーチの機会をできるだけ設けるようにしています。発表に慣れさせるためには、何といたっても発言や発表の“場数”を多く踏ませることが大事です。一人一人の「はっぴようの力」を育むことで、活発な話し合い、そして豊かな学び合いにつなげていきたいと思ひます。



学級朝の会で、タブレットで撮った写真を電子黒板に映してスピーチする6年生(1学期の様子)

算数の授業で計算の仕方を説明する1年生

「ひび割れ壺」



(作者不詳 菅原裕子訳)

前回のお話の続きです。いよいよ最終回です。

水汲み人足は、ひび割れ壺を気の毒に思ひ、そして言ひました。

「これからご主人様の家に帰る途中、道端に咲いているきれいな花を見てごらん。」

天秤棒にぶらさげられて丘を登っていく時、ひび割れ壺はお日様に照らされて美しく咲き誇る道端の花に気づきました。

花は本当に美しく、壺はちょっと元気になった気がしましたが、ご主人様の家に着くころには、また水を半分漏らしてしまっただけ自分を恥じて、水汲み人足に謝りました。

すると、彼は言っただけです。

「道端の花に気づいたかい？ 花が君の側にしか咲いていないのに気づいたかい？」

僕は君からこぼれ落ちる水に気づいて、君が通る側に花の種をまいたんだ。そして君は毎日、僕たちが小川から帰る途中水をまいてくれた。この二年間、僕はご主人様の食卓に花を欠かしたことがない。君があるがままの君じゃなかったら、ご主人様はこの美しい花で家を飾ることはできなかつたんだよ。」

私たちはみな、それぞれユニークなひび割れをもっています。

私たち一人一人が、ひび割れ壺なのです。

私たち大人の仕事は、子どものひびを責めることではありません。

自分のひびを責めることでもありません。

子どものひびのために花の種をまくこと、それこそが親や教師の仕事です。

子どもたちはどんな花を咲かせてくれるでしょう。

